

わたしから始める、世界が変わる

Hunger Zero News

2019. 6
No.347

ハンガーゼロ・ニュース

Contents

ハンガーゼロ活動報告

モザンビーク・サイクロン緊急支援
～元駐在員が現地から報告～

ポリビア駐在 小西スタッフ連載⑬

～ラテンアメリカの人々とともに～



ぼくたちのサポートチャイルド
ハジヤラくんに出会えたよ!

ハンガーゼロ親善大使

ナイト&デライト

ウガンダスタディーツアー体験記 P.4-7

1分間に17人 (内12人が子ども)
1日に2万5,000人が
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています

サイクロンで被災された人々への応援を感謝いたします。
元モザンビーク駐在員ローレンス綾子(当時：小倉綾子)さんが4月中旬から3週間、国際 NGO アイリスグローバルの緊急支援活動にボランティアとして参加。活動とともに、かつて JIFH スタッフとして派遣されたベイラ市のムササ地区にも足を運び、被害状況を知らせてくれました。ハンガーゼロは現地 NGO との協力や国際飢餓対策機構モザンビークとともに被災者支援を進めています。ぜひ続けて応援をお願いいたします。(P.7 に関連記事)



綾子さんと国際 NGO メンバー

Hunger Zero 活動報告 モザンビーク・サイクロン緊急支援

生活基盤の多くを失った人々の厳しい現実

元駐在員 ローレンス綾子さんが報告

サイクロン・イダイが襲った日(3月14日)は、夕暮れ時から風がどんどん強くなっていったそうです。それからものすごい風と雨が打ち付け始め、停電になりました。人々は、周りの屋根が剥がれて飛んでいたり、木が根こそぎ引き抜かれたりして屋根の上に倒れてくる音などを聞きながら、数時間を過ごしました。真夜中になると辺りが静かになり、少しほっとしたところで、ブーメランのようにサイクロンが戻ってきて、明け方4時ごろまで最初よりもっと強烈な風と雨がベイラを襲いました。壊れかけていた屋根や、塀などが2回目の上陸で相当崩壊したそうです。

夜中に水没してしまった村々は、6百人以上の人々が命を落としました。村全体が水没したブジという場所を訪れましたが、泥やわらで出来た集落はほとんどの家屋が倒れていました。またマンゴやパイヤ、ココナツの木々も倒れ、むき出しになった土に強い日差しが照りつけていました。地元の牧師によると、洪水の夜は、近くに唯一あったコンクリートの建物に登れるだけの人々がよじ登り、そのまま3日間も救助を待ったそうです。

サイクロンで稲穂もメイズ(トウモロコシ)も、全て水に浸かってしまい、人々は家と同時に食料も全て失いました。畑を再開できる人々は、今大急ぎで種を蒔いています。メイズは3ヶ月後にはなんとか収穫が望めそうですが、当分の間、深刻な食料不足の問題は続きそうです。

家を失った人々は、NGO や政府が設置した仮設住宅で集団生活をしたり、支援で受け取ったビニールシートやタープなどで仮小屋を作ったりしてしのいでいます。主幹道路を車を走らせると、まだ村には戻れない多くの集落が道路沿いに存在します。



急場をしのいでいる仮小屋。それでも子どもたちは明るかった(綾子さん)

もう一つの大きな課題は水です。洪水で人々の貴重な水源が汚染されていて、コレラ感染者は5千人を超えました。コレラは感染すると1、2日以内に死亡するケースも多く、感染率も非常に高い危険な病気です。NGO や自治体職員などが村を巡回して、注意を喚起したり、フィルター付きバケツを配布したりしています。今までどれだけの人々がこれらの村々を巡回して説明したかわかりませんが、洪水の後でさえ、裏庭に掘った穴からコップですくって直に飲んでいました。それを見ると、20年前に駐在していた頃とあまり変化がなく、何を通して人の行動や価値観は本当に変わるのだろうか、と改めて考えさせられます。



マンゴツリーキッズの園児たちと被害を受けた園舎

元里子が運営する幼稚園も被害

私は JIFH を通して派遣され、1996年から2001年までは、国際飢餓対策機構モザンビークの子どもプログラムのプログラムマネージャーとしてベイラに住み、ここドンドから15分ほどのマファンビッシ(ムササ地区)でも子どもたちの支援をしていました。今回、元里子(サポートチャイルド)の一人で「マンゴツリーキッズ幼稚園」を運営しているアデリーノ・セメンテの家に立ち寄りしましたが、幼稚園の被害は大きく、子どもたちと地区の人々へのサポートの必要性を強く覚えました。

4年ぶりに訪れたモザンビークは大きな苦境の中にあります。しかしいつものように笑いが絶えない陽気な国でもありました。私はそれでも今日を明るく生きる人々が「やっぱり大好きでたまらない」との思いを強くしました。

FH モザンビークの緊急支援活動

カボ・デルガード州の州都ペンバでコレラの発生に対応するためユニセフの居住センター(accommodation centers)で給水サービスと衛生キットの提供を行っています。



標高4,000mを超える高地・コンフィタル村のサントスさん一家。長年キリスト教会に通っていましたが、両親は子どもたちの命の大切さに気づきませんでした。2018年5月8日、当団体のサポートチャイルドで3人兄弟の末っ子・マリオ（当時12歳）が麦の脱穀機に左手を挟まれて3本の指を失った時、農作業から帰ってきた父親は血を流している彼を見つけ、すぐにFHスタッフを呼びに行きました。しかし息子を保健センターに連れて行こうとはしませんでした。母親は「子どもたちが生まれてから、私は一度も子どもたちを医者に見せたことがありません」、また父親は「医者に見せたら多額のお金がかかります。だから具合が悪くても学校を休ませればそれでいいと思っていました。」と言いました。

そこでFHスタッフは「人の命は神様から頂いた神聖で大切なもの。“自分たちはどうせ何もできない、この貧しい状況が変わるはずがない”という考え方・価値観は間違っている。私たち人間は、誰もが素晴らしい能力と可能性を神様から与えられているのですよ!」と話して励ましました。

変わるもの と 変わらないもの



ポリビア多民族国
駐在 小西小百合

サントスさんはその言葉に心を動かされ、マリオを保健センターに連れて行きました。その後コチャバンバの病院に転院し翌日の手術は成功しました。私たちFHはマリオが快復するまで病院に通って、励まし、支援し続けました。（治療費軽減申請手続きのための書類作成と手続時の同伴、また実費の半額支援等）

もしあの時…

父親は「私は息子のことよりもまず費用面を心配していましたが、FHスタッフに励まされ、神様の助けを心から信じて行動しました。息子は健康を取り戻しました。もしあの時、息子を病院に連れて行かなければ、彼は死んでいたかもしれません。神様と、サポーターに感謝しています。」と語ってくれました。

また両親は最近ではFHが行う様々な活動にも参加して、食べることの大切さに気付き、より良い食生活を子どもたちに提供できるように努めています。

父親は現在教会の役員を務め、一家は地域に仕え近隣の人へ自分たちの体験を話すようになりました。息子のマリオが元気になり、良い成績で学年を終えたために周囲の人たちは良い刺激を受け、以前よりも自分の子どもたちの面倒をみるようになりました。

このように、親たちの価値観が変革されて子どもを大切に育むことを学び、家族間の関係改善という嬉しい変化を見ることができたことを、スタッフ一同とても喜んでいます。

わたし(神)の目にはあなたは高価で尊い。
わたしはあなたを愛している。 聖書



病室でマリオ君と



ナイト de ライト

ウガンダスタディーツアー体験記

【長沢 紘宣】 サポートの重みを実感

親善大使としては 2 度目となる海外視察に行ってきた。今回はウガンダ。どんな出会いが待っているのだろうと期待に胸を膨らませてアフリカの地に降り立ちました。



ウガンダの都市部は日本と変わらないようなビルや商業施設がたくさんあり、若者たちはおしゃれをして、想像していたアフリカとは違う光景でしたが、都市部を出て車を走らせるとすぐに、赤土の舗装されていない道路、両側はるか向こうまで広がる草原と、ザ・アフリカという景色でした。

いくつかの村をまわり、学校やサポートをしている子どもの家を訪問して、感じたことは、やはり生活の基盤が日本とは大きく違うということ。都市部では料理も海外のものを食べることができますが、村々ではヤギか鶏の肉。トウモロコシの粉をペースト状にしたものと、甘くないバナナを蒸したものなど、メニューは限られています。生活用水にしても綺麗な浄水など無く、家畜の糞や虫の死骸などが混在する溜池から汲んで来たもので洗濯などをする。かえって汚くなるのでは?と疑問に思うほど、日本からみると苛酷な環境で過ごしていることが分かりました。平均寿命は 52 歳くらいだそうで、確かに村を歩いていてもおじいちゃん、おばあちゃんを見かけることはほとんどありませんでした。あの環境で生活していたら、長くは生きられないのかもしれないと思います。

実際、学校を訪問した時も、10 歳くらいの女の子がずっと手をつないで学校の敷地を案内してくれましたが、周りの友だちに聞こえないくらいの小声で「water」と何度も囁いて

きました。僕が持っているミネラルウォーターが欲しかったのでしょう。学校からも僕たちに物をねだるようなことはしてはいけないうちどもたちは教えられていたそうですが、それでも聞こえないように何度も僕に水をねだってきていました。ペットボトルに入ったミネラルウォーターを口にすることがあまりないのかもしれませんが、僕も聞こえないふりをするのがとても心苦しかったです。その子の少し寂しそうな横顔を忘れることはできません。

もう一つは、子どもにとって支援を受けるということがどれほど大きなことかを痛感しました。ある家を訪問したときに、その家の男の子に「今までで一番嬉しかったことは?」という質問を試みましたが、サポートを受けることが決まったときです。と答えてくれました。それだけハンガーゼロの働きが彼らにとって大きなものであることが分かったし、まだサポートを受けることができていない家庭にとってはどんなにサポートを待っているのだろうとを考えさせられました。支援の輪を広げて、一人でも多くの命のために、豊かな国にいる僕たちにできることをしなければいけないと思われました。

音楽は生活の一部

ミュージシャンとしては、音楽が彼らの生活の中で本当に大きな部分を担っているというのを感じることができたのは嬉しかったです。彼らは音楽が大好きです。大好きというよりも、本当に生活の一部です。喜びや感謝、悲しみさえも彼らは音楽で表現していました。それは、僕らにとっても大きな励ましとなりました。

今回、日本にあってウガンダに無いもの、



ウガンダにあって日本に無いものを見ることができました。物はなくても彼らの心は豊かだし、力強さがあります。でも、確かに貧しさの中で失われてしまう命や健康があり、生きていくために必要な知識を得ることがまだまだできていない現状があります。これからも彼らのために自分にできることは何かを考え、実践していきたいと思います。

【田中 満矢】 ウガンダにある豊かさ

日本にはあってウガンダには無い豊かさがあります。でも、ウガンダにはあって日本には無い豊かさがありました。

僕らのバスの姿が見えると走り寄って手を差し伸べ、笑顔で握手



を求める小学校の子どもたち。日本ではすぐに飽きるであろう簡単な折り紙の凧を持って大喜びで走り回る子どもたち。帰りのバスが出発すると足がタイヤの下敷きになるんじゃないかと思うほど近くを走って見送る子どもたち。今回のスタディツアーのテーマは「彼らの宝物を見つけよう」でした。ずっと考えながら村や家を訪問していましたが、あたかもそれは「わたし」であるかのように感じさせるほど彼らはジッと見つめ、手を差し伸べ、追いかけてくれました。

小学校に着くと見たことのない特徴的なリズムをとって歌い踊り歓迎してくれました。マイクなしでも十分に響かせる音量とキレッキレの踊り。ソクソクする打楽器の演奏にドラマーの僕は一緒に叩きたくなるのを必死で我慢していました。彼らの歓迎を受けて今度はナイト de ライトが歌で応えます。

手拍子を合わせ一緒に腕を振る。ウガンダ特有の口笛の声援を受け、僕らも真似をして返す。音楽が国境を超え一体感を与えた瞬間でした。

今回の旅でひとつだけ後悔があります。それはプレゼントしようとして持っていったfrisbeeと

習字セットを持って帰ってきてしまったことです。frisbeeで子どもたちと遊びました。彼らは大喜びだったのですが、旅の序盤だったこともあり「もう少し使ってから一番いいところでプレゼントしよう」と思っていました。しかしその後frisbeeを使うタイミングはなく、気づけば贈る機会も逃してしまいました。習字セットも同じです。「あの時プレゼントしておけばよかった!」と後悔しても時すでに遅しでした。

私が天国に帰った時、同じ後悔をしたくありません。「地上でもっと分かち合えればよかった!天にはこんなに宝があったのに!」と言いたくありません。経済も体力も時間も、分かち合うことを惜んでしまう僕です。しかし、私たちを養ってくださっている豊かな天の父は「与えなさい。そうすれば与えられる」と言われるお方です。ウガンダにあった「豊かさ」に心満たされました。そして私たちが持っている「豊かさ」があります。世界中が大家族。今日という日が終わる前に、恵みのおすそ分けができる人でありたい。そんな願いが与えられた旅でした。

【平野 翔一】 この違いは何なんだろう

ハンガーゼロの親善大使をしていなければおそらく訪れることがなかったアフリカ。マイナス15度の札幌から30度超えの暑い熱いウガンダへの旅。このスタディツアーを通して、ここでは語りつくせないほど多くのことを感じて帰ってきましたが、僕の中でこのツアー全体を振り返った時に心に浮かんだ言葉は「違い」でした。



あらゆるものがどんどん便利になっていき何不自由なく暮らせる豊かな日本と比べて、物質的に貧しいと感じる中でも子どもから大人まで協力し合いながら生活しているウガンダ。僕たちが日本で過ごしている生活や感覚とすべてが違いました。

首都カンパラから車で数時間のナムトゥンバ地区。ここで出会った人々の生活に僅かでも触れることができたということが僕の中で感じた違いをより明確に感じ【次ページに続く】

僕たちのハジャラ君に会えたよ!

「ここでは、誕生日をお祝いする習慣がないと聞いて、誕生日当日と一緒にケーキを食べて、一緒に歌って、お祝いしたことは、思い出に残る1日になったのかなと思うと、自分たちも嬉しかった。」

「両親がいないと聞いて、自分たちが彼をサポートしていることが、大きな意味があることだと感じた。」

「実際に彼に会えて、ますます身近に感じた。僕たちが帰るバスを追いかけてきてくれた彼の姿を見て『一緒に日本に帰ろうか』と言いそうになった。」

Happy Birthday



させてくれました。

村の人がいつもしている水汲みや洗濯、料理。僕たちが普段あたりまえにしている家事がこの村では大変な労力と時間がかかるのです。一緒にお手伝いさせてもらいましたが、これが本当に大変な作業で、僕たちがゼーゼー息を切らしながら水汲みや洗濯をしていると、近くにいる子どもたちがやり方を教えてくれたり手伝ってくれました。村の子たちは自分の家のために汲んできた水だけでなく隣近所の家族とも助け合いながら家事を手伝っているようでした。自分だけの力では生きていけないとわかっている彼らは、家族以外の村人もまるで本当の家族のように助け合いながら暮らしているのがわかりました。このような光景も今の日本ではなかなか見ることがありません。

学校を訪問した時にはたくさん子どもたちが笑顔で歓迎してくれましたが、その交わりの中であることに気がつきました。それは制服を着ている子とそうでない子がいること。靴を履いている子と履いていない子がいること。この村の中でも家庭によって生活水準の違いがあるのかと思っていました。実はチャイルドサポートを受けている子とそうでない子の違いだと聞きました。1人毎月4千円のサポートによって子どもたちの教育や生活を大きく変えていくことができるのです。日本の子どもたちは高水準の教育をあたりまえに受けることができます。

他にも書ききれないほどたくさんの違いを見ました。自分の目の前に多くのものが揃っているはずの日本と、備えがない中で目の前にあるものを大切に、また感謝しながら生きているウガンダ。満ち足りるとはどういうことなのか。本当の豊かさとは何か。日本とウガンダの違いからそういったことを考えさせられた、僕の人生にとって忘れられない旅となりました。

「三橋 恵之矩」 命の重さが違うのか…

「どれだけの人がアフリカに行けるチャンスがあるのか」と考えた時、ただただ感謝で神様が見せたい景色、感じて欲しい事、受け取って欲しい物を素直に受け取れたらと出発前から期待感に溢れる楽しみなツアーでした。



マイナス15度の北海道から30度超えのウガンダへ。飛行機を出た瞬間、寒暖差45度ある乾いた熱気の歓迎を受けたのがウガンダツアーの始まりでした。どこを見ても日本人はおろかアジア人は居ず、まさに異国と言う状況に旅の冒頭か

サッカーボール寄贈
&水運び体験



ら、テンションが上がりっぱなしでした。そしてバスの中から見る景色は見たこともない家、お店、木々、日本にいたら見る事がない壮大な景色。魂の奥底から湧き上がってくるエネルギーを感じました。本当に色々な体験をし色々な想いがこみ上げるスタディーツアーで、全部を事細かに書き上げようとしたら何ページになるかわからないので、強く思わされた事を書こうと思います。

日本は色々な物で満たされ過ぎていて本当の意味で生きるという本質に目が行きづらい国だと感じました。命を維持すると言う意味ではなんの不自由もなく、病院など人として生きる上で全ての環境が整っている国です。でもなぜ自殺者が後を絶たないのか?そこで思わされたのが物質に満たされる事がイコール幸せではないという事です。むしろ物がありすぎて創造主である神様が望んでいる「生きる」という本質が見えなくなっているように思えました。

ウガンダは日本に比べると物質的には余り豊かではありません。食文化を見てもすぐ分かりますがそこに分けるゆとりなんてどこにもありません。日本ではすぐ治ってしまう様な病気でもウガンダでは亡くなってしまふ人が多くいます。圧倒的に大人になれるパーセンテージが日本に比べて低いのです。ですが、目の輝きが違います。生きるという意味、生きている感謝、そもそも自分の命の重さが国単位で違うのではないかと思いました。生きたいのに生きることができない日常を目の当たりにしてきた人たちは、本当にバイタリティーに溢れている、そう感じました。

そんな国に私たちが出来る事は至極単純で、私たちが与えられている物を分かちあえる事、そのことによって私たちの心が豊かになっていく。神様の目線に立ち聖書の価値観で行動する必要があると思わされたスタディーツアーでした。学校訪問また学校でのライブ、サポートをさせて頂いているハジャラ君との出会い、FHウガンダと歌って踊って一緒に過ごした短い日々が間違いなく自分にとってかけがえのない時間になりました。機会を与えてくださったハンガーゼロの皆様、そして神様に感謝しかありません。

次回の
ツアー
2020年

2020年2月又は3月に「バングラデシュ・スタディーツアー」を実施する予定です。
詳しくは東京事務所TEL.03-3518-0781 まで

ハンガーゼロを応援する業界初の支援型駐車場



愛知県名古屋市で4月から時間貸し駐車場（コインパーキング）の売上の一部をハンガーゼロに寄付する、という業界初の「支援型駐車場」というビジネスモデルが始まりました。

手掛けるのは不動産、駐車場業を営む株式会社グレイス・コーポレーション代表取締役の石橋憲さん。(写真⑥) 石橋さんは子どもの頃から国際協力や社会福祉に関心があり、学生時代から災害支援ボランティアやネパールの国際ボランティアに参加するなどしてきました。そして会社勤めをしていた20代の頃に友人の勧めでハンガーゼロが主催するファシリテータートレーニングに参加した事で、世界や身近で助けを必要としている人を支援する働きに加わるようになり、以後ハンガーゼロ愛知事務所のボランティアとして10年以上関わってくださっています。現在世界食料デー名古屋大会実行委員を務める他、2012年に起業したご自身の不動産ビジネスで、これまでハンガーゼロの寄付型自販機を3ヶ所で設置してくださいました。

寄付型自販機をヒントに駐車場にも

そのような中「もっと自分のビジネス分野で社会貢献の為に活用出来る方法はないか」と考えておられたとき、その寄付型自販機をヒントに時間貸し駐車場でも応用出来る



【駐車場所在地】

- グレイスパーク覚王山通第1 名古屋市千種区覚王山通 9-31
- グレイスパーク妙見町第1 名古屋市昭和区妙見町 50-2



気づかれ、この4月に開設した駐車場から早速実行へ。その際、駐車場のデザインもより親しみと関心を持てるロゴ・デザインに変え、一般の駐車場を利用される方や土地所有者（貸主）の方にも国際協力や貧困について知っていただく機会になればと、「支援型駐車場」として大きく掲示してくださいました。

主に愛知県で駐車場、不動産の運営をする石橋さんは、今後は地域に関係なく首都圏や全国でこの支援型駐車場を増やしていきたいと願っておられます。(愛知事務所)

支援型駐車場 問合せ先：(株)グレイス・コーポレーション
TEL: 0120-229-605 mail: info@grace-house.com

JAMMIN オリジナルTシャツなどの販売でモザンビーク応援



チャリティー参加者から120,870円の支援を頂きました※5/21時点

SNS上でチャリティーのシェア・いいね数は Facebookが678 twitterが49でした！
1シェア・いいねに対して、協賛企業より10円がハンガーゼロへ届けられます。



JAMMINさんを始め、応援してくださった皆様に心から感謝いたします。

支援はモザンビーク緊急支援のために使わせていただきます。

【チャリティーアイテムは今後も入手可能です】

もし、「購入を逃してしまった！」

「今この企画を知った。今からでも応援したい！」という方は是非、大阪事務所 (072-920-2225) までご連絡ください。

※キングダムビジネスから購入いただけます。



ハンガーゼロ(日本国際飢餓対策機構)は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体(NGO)です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、海外スタッフ派遣、飢餓啓蒙を行っています。現在は、国際飢餓対策機構連合(Food for the Hungry International Federation)の一員として、18か国60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころからだの飢餓」に応える活動をしています。

理事会開催

一般財団法人 日本国際飢餓対策機構の「定例理事会」が6月7日(金)に大阪で開催されます。

今年度下半期(2019年1~4月)の報告、次年度(2019年7月~)の事業計画などが討議されます。

●東京事務所イベント報告

初の写真講座に12名が参加

撮影の基礎と実際にプロに学ぶ

4月20日土曜日、東京事務所イベント「人に伝わる写真の撮り方講座」をプロフォトグラファー神森沙織さんを講師に開催し、イベント初参加者を含む12名のカメラ愛好者が集まりました。

午前はシャッタースピードや絞り値、ISO感度などカメラ撮影の基礎を学び、午後は代々木公園で撮影実習をしました。講師のアドバ



イスをいただきながら、楽しく撮影実習ができました。

写真は、撮り方ひとつで見る人に与える印象が違ってきます。各種の宣伝やチラシに使う写真には“時代性”と“クオリティー”が求められます。今回はどうすれば、見る人の心をつかむ写真を撮影できるのか、そのヒントを学べる機会となりました。参加者に好評を

いただきましたので第2回も企画しています。次回はぜひ参加してみてください。(報告:鶴若スタッフ)

～香りもおいしい～

コーヒー3種セット

レギュラーコーヒー(粉)

品名: ①モーニングブレンド

②スマトラ ③モカブレンド

原料産地: インドネシア、ニカラグア、エチオピア等。各200g入り
3点合計2,700円を送料、税込3,000円でお届けします。



◎お支払い: 後払い
郵便局払込で株式会社キングダムビジネス口座へ。

【お申し込み先】

株式会社キングダムビジネス

電話 06 (6755) 4877

ウェブサイトからも、

注文ができます。



書き損じ「はがき」で国際協力!

「年賀状」の書き損じたものやポストに未投函のもの(通常はがきや古い年賀状やかもめーでもOK。但し書き込み、汚れは不可)がありましたら、大阪事務所までお送りください。切手に交換してハンガーゼロの活動に使わせていただきます。

※記入後にスマホで撮影し、下記メールアドレスにお送り頂いても受け付けます。

Child Supporter

チャイルドサポーター

感謝のご報告

2018年6月から「300人の子どもたちにサポーターが必要です」と特別アピールを実施させていただいて今年5月で1年になります。この1年間、新しくチャイルドサポーターとなってくださった方は185名でした(2019.5.15現在)。皆さまのご支援を心から感謝いたします。引き続き、サポートをよろしくお願いいたします。



はこちら▶



サポーターお申込み欄 FAX072-920-2155

氏名			
(TEL)			
住所	〒		
申込日	年	月	日 NL 347号

<input checked="" type="checkbox"/>	下記から希望されるものをお申し込みください
<input type="checkbox"/>	ハンガーゼロサポーターとして協力します。 ①毎月()円 □ (1□1,000円) ②一時募金として 円協力します。
<input type="checkbox"/>	継続募金(JIFH サポーター)として協力します。 毎月()円 □ (1□500円)
<input type="checkbox"/>	チャイルドサポーター(子ども1人毎月4,000円)の説明書(申込書)を送ってください。
<input type="checkbox"/>	郵便自動引落とし申込書を送って下さい。
<input type="checkbox"/>	その他の銀行自動引落とし申込書を送って下さい。

上の申込書をコピーして必要事項を記入の上、FAXまたは郵送にて大阪事務所までお送りください。届きましたら確認書類等を送らせていただきます。お電話やウェブサイトでも申し込みできます。

Hunger Zero サポーター 現在...46000口

■発行者 清家弘久

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構



Webサイトアドレス <http://www.hungerzero.jp>

eメールアドレス general@jifh.org

フェイスブック facebook でハンガーゼロで検索

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイト

①郵便振替 00170-9-68590 一般財団法人日本国際飢餓対策機構

②他の金融機関からの自動振替③クレジット、デジタルコンビニ



大阪 〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
東京(広島) 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
東京(東北) 〒460-0012 名古屋市中区千代田2-19-16 千代田ビル3F
TEL (052)265-7101 FAX (052)265-7132
愛知 〒900-0033 那覇市久米2-25-8 メソソク米202号
TEL (098)943-9215 FAX (098)943-9216
沖縄
USA Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa
8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605
TEL (510)568-4939 FAX (510)293-0940



Hunger Zero



JIFH



チャイルドサポーター